



伊13  
1800  
#36



特 13  
1833  
36



繪本古図記三篇卷之十二

目録

若川小早川軍議決定の語

高松城合戦の圖

隆系元基元長軍陣定の圖

若川元基三澤為虎を討る圖

若川小早川のあゝ麻山は柵を附る圖

安國寺惠懷秀若の陣まゝの圖

秀若京都之捕密使活

は圖

八

清水長九郎門射自害之活

安國寺惠瓊高松の城を来す圖

清水長九郎門射自害の松の大お等切後の圖

秀吉単騎馳系都話

秀吉諸將を集めて大變を物治る圖

秀吉一騎都を登る圖

繪本右圖記三篇卷之十二

吉川小早川軍議決定

河内國の羽柴統元も秀吉毛利の三家と對陣去月月の始より信  
 中高松の城を圍むるに松の城の郷中より小早川山の上は松の  
 一面の池沼を湛へて水をとりも名所得見部川又白水川大福川の流  
 を合せ此郷中へ堰入るに今又月の末よりその水益高く漲るるに  
 浸り丘を蹴踏して大湖水を造り今又計り水増らるる松の城  
 水底に沈み城中の男女老幼皆一に若一人も死に且又待のり也  
 秀吉城の勢既又難攻に及びぬと見給い大船數十艘を擧げ  
 城中と眼より見給はる大筒小筒の銃炮を發射かけ懸を以て  
 城を突入し知らるるに城中の士卒十死に九は隔るる心





いづまの  
松の城  
合戦の圖

東海道五十三次



東海道五十三次

中嶋大炊女荒本が一黨の秀吉の攻め防ぎ林三郎行山勲兵備多  
 紙又兵備等の後回勢又出て家を破らばと後砲をお出火箭を放  
 らけり水を流して我々の要害多勢をとくも一帯一帯を破り得ど  
 されども水は次第又停り来て今十日を経りぬらば戦ひついで城中の  
 兵皆水原よりぬぐ表に「次第之を又依て後港の大お右川元吉小  
 又川澄系つふして塘を切て落さざるとまじく計議深定められ  
 秀吉大軍引て去るも軍令甚厳後陣の構へ堅固をれば切落とまじ  
 初もわく兵用もさき長治後のも引てたぐくべくもつらうあり  
 附右右川元吉の嫡子治部少輔元長進々出て宣ひくくは後又後港の  
 して敵陣を隔て守居る人への後港」うら後にもなく御父信長大

軍を降下向せらば「風使とれぬ勢は益増り信長家より別つは二十  
 万騎の減とさうは渠の軍の益機は際味方の兵士の心」多松の城か  
 つののう後毛利家惣領軍及ぶに「し信長はまご出張せざるも  
 烈き我はつらなり後港の御勢も多くゆい秀吉の旗本へ切て  
 後港の「某の雲及伯石石の勢をね羽柴七郎左衛門を切崩  
 透るく押詰て秀吉の勢に突入後港の御勢と揆んで表討むを  
 勝利一附とせよ」徳米の厚田勢の後表表裏牙一の弱兵の味方  
 合我の利を得る強き方又属せんし附の勝負を合せ一國又討て  
 なるるいはし「おの厚田身の妻老唯此一舉の中又突つ死一生の  
 合戦せらば」と席を打てやされり小又川澄系に智意ふくく  
 「先は」我を後とさう大なるれは率然と善をさうは用と用



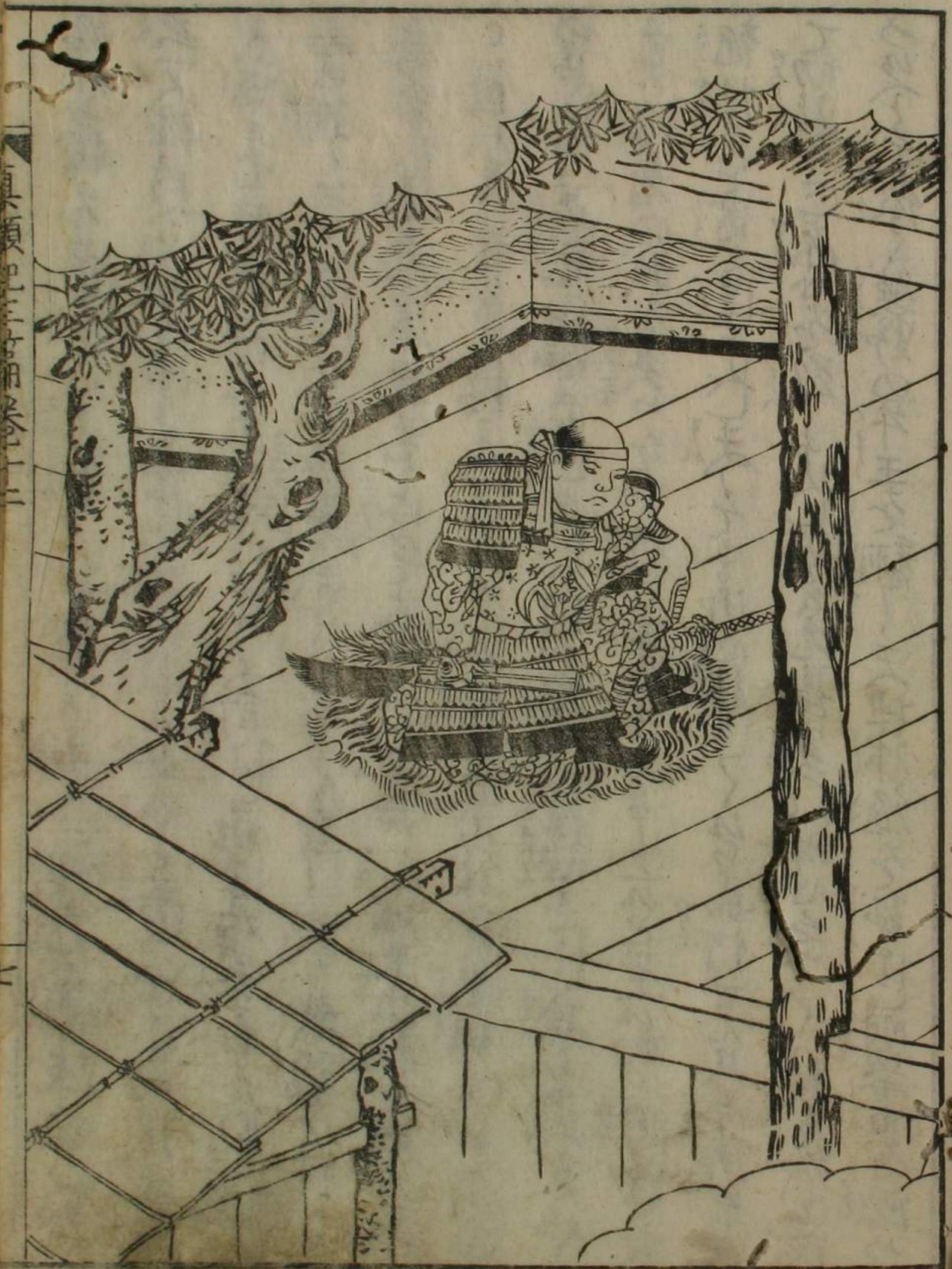
源氏物語  
源氏物語  
源氏物語  
源氏物語

源氏物語  
源氏物語  
源氏物語



今元長が中一理ありと存る元長も亦を討せ某後陣に續いて  
 戦ひる敵を切崩さるる中より當の中よりあり用なき對陣に日敵をさへ  
 ちり唯一戦と安定せらるるの外又も他りあさるるに時及後系長次  
 て仍の報き安し程と處で是の敵の後陣續き先と貞之の合戦宜  
 くはしと同心せしむるふとさう明日烈戦を以て敵味方の目と務え  
 と内陣定一攻しうるる亦に三澤の虎と毛利の家臣秀吉志と通  
 し裏切とんき謀計ありと告る者ありと味方の諸士互に疑心とせじ  
 惟某こそ敵一味し考ふと列て味方の陣を討しむるは行某の  
 秀吉も亦も几両手を斬て敵又降るるものと強き心と合さる程は  
 先一戦も多しとく惜く延刻しうるるに圍くの丘に敵は

信長後陣に續き近日二十余万の大軍を押し来るは味方の懸え  
 の旗本の外の援兵も来るべき勢もなく却て洋心の者多く不詮對  
 陣はしとく元長後系も陣を拂て攻圍せらるるに私言あり  
 何と申さん惣軍後系はなかりて始後とらるるにぞんはるる元長  
 て元長より子陣系おん久村久虎門只一人を召遣し廂山の頂に登り  
 陣定らるるに三澤其外の敵は敵一味とてゆる上り毎二の敵と  
 ば難し怒り物の利もなげ仮武者は味方の足纏わらるるに同此  
 廂山は柵を結ひ逆系本引に勢計を引ひたまふ敵と引きて  
 一戦は三澤をばら其外の者た秀吉の心を通るるに實ならば秀  
 吉は高陣切らるるに其時秀吉の旗本一文字に切て入候死せらるる  
 計後系より引て陣定は二攻し皆本陣に攻らるる志らるる



三澤の虎  
 を蔵る圖

真景三澤の虎を蔵る圖



治部卿元長血争の表おのりて途より安三澤の虎が陣を以て  
 只一人陣内へ入ると通りぬる虎が膝の股を咬みと居りいふる虎秀吉  
 と味して味方の陣を破りやると計はぬる其実吾を以て  
 多の勢とそと争うていぬ実あくのぶとくわうへ今我頭を斬り  
 秀吉に送りぬる虎をばて大さし勢きき成去ひ既を地へ附  
 こい思ひもようざり信そこそ以不肖の某に以先祖より毛利家  
 の臣として君恩山海を遂にたれ何ぞ獨りに逆心をし扱やんとや  
 其の後者の我を失つぬるもあまぬるを中よいとそいひ思ひよ  
 祝言文と書て置やせまうても御心解くはく如何せん只今御花  
 て切腹に赤心を取やせと云元長家へ御心解くは折紙と書  
 りてと之れに徳野の牛王を翻し天地神祇を證し御書を認め

持げたる元長此より強て懸きまらぬとて盟書を懐中陣を以て  
 ぬらうる又之代修理女も逆心の企めとて命を奪はるる先きか押  
 して元長が令身元氏集が陣の上なる山より打出て陣をえりて  
 麻山の巨方への俄に中知して柵を結せ芝去を築き弓矢砲と構  
 陣の備へ堅固に成就すれが今や味方の中よかく殺心の者あり  
 とし疑義の朋とるべきといふるをさうりたりそいよむと諸率りり  
 陣中自平和に居りしにさうりたりば从者の計謀のぶく羽柴七郎元清  
 門が陣へ切懸りて日限の明後六月又日の夜さると相定め務く  
 其用意をかきとりたり御其羽柴日六月日又天秀若より侍  
 者を小又川が陣に居りたり安國寺惠瓊とる僧を以今急  
 遣りて中入度心のひとを招きたりけ安國寺とる毛利照元



吉川  
小又川  
の  
西の  
山  
柵  
附  
の  
図

吉川  
小又川  
の  
西の  
山  
柵  
附  
の  
図

依の僧して菴及廣徳の城下に抄ひく大地の僧之先年秀吉  
いま松下加兵衛之綱は仕込し討共利の橋の茶店して秀吉をけん  
天下と知れざる奇相と云らるる今小田原石の大目して教方將軍  
勢を合し毛利家と對陣し及ぶ時既し人々業をなすとの討つ  
と私し思ひ居たりしに照元希ふ吉川小子川長陣の吊いとて入  
希ふ爰より来り秀吉の四叔とあれ吊い度有澄系と若て秀吉  
の陣来り互つしつを語り頗る四膳を惜したり是又依て安國寺  
毛利の陣中し在りしを刻し後を石道之惠獲行りやうん急ぎ  
澄系はけのをや後若引し秀吉の陣に到りたり秀吉惠獲と陣  
中し信し入席と云てやれらるる近き秀吉元澄系と云ふ  
抄ひく對陣せしり金く本意にあはれ其友の信長と照元と水魚の盟

物をば天下泰平なりしやんと思はるる希ふ軍義所は後  
一河下向ふそより両家忽し其の盟を破り横將矢と邪一異城  
信しき間と如し其信長の代官として照元元澄系等と詳  
を重し万死を觀ど身骨を珍陣に是又依て國東に國九乃小國  
の將士等此流し原に邪威を添ふり攻戦す止討はし家二万民團  
形し途差の中し若しむらにしに信長の本心私の體言をん天  
下泰平の功と妨んやよく和睦して信長の陸奥出羽の東夷を退治し  
照元大友將を討て西戎を靜謐たりしに忽天下平定しに民  
平を祝ふに其信長が希ふ新の事と其の並く信合らるるに  
はれしに悉く秀吉が私の志を承りあはれにけ有和僧元澄系  
一抄し和平の儀お調ふ抄ひてふの物若す國と境に南の國兒



那川を切て引かやばし其れい伯父の南条小幡近奉味方より忠勤と抽  
 比渠が本領を宛約ふべきの所と見那川を境とする我軍の出陣  
 してその松の城を奪るが清水長尾門が首を力んで和睡せんま  
 信長公の恩に終りん不もいふと家と从清の宗治の切腹致させし  
 け有え去澄系よりは披露せらばと信長安國寺安細合謀退  
 きて毛利の陣へ攻め去澄系面おも對面し去るのば中々元  
 去澄系案外の事なり悟言に思惟してわろく良みて元去澄系  
 々の物にして和孤を謀也と孫が合言今款と味方の形勢を  
 考るに彼が兵の多く我勢の少し其上信長近日出張とては又我  
 の勢を奪ぬに味方外より兵を援兵なく眼を松の層城  
 目を算へて然らば款は軍心一致に軍令と守味方へ心と抱き也

軍一より和をとりしは款は十分の勝利あり味方又十分の敗陣あり  
 家をも思ふよいまも我にからん以て勝級換利懸然と秀吉又智  
 勇の所之行をけ理を去るらんや然も今取らして和孤徳ふこと  
 乞不審の才之勢にけ扱を去るらんばと討に澄系よりは去る元去  
 の是れ一く我心と合へり併るが我軍馬と段に家に出張せしむ  
 る松城の難儀を敷い城を清水を助んがためなり秀吉松を切て供  
 水と為し宗治をばし城中の軍民を助け去るに抄いては  
 任せ和平は是後をして家に向ひ詮用ちり宗治切腹とけ  
 和睡の後思ひよりは我に死を絶せしむと家と抄いては  
 是れ一策に再び安國寺を此有秀吉と善しむ

秀吉京都之捕密使

秀吉  
京都の  
密使を  
捕る  
圖



真蹟記三篇卷七



真蹟記三篇卷七

羽柴隆元が秀吉に勝つて三軍と止め安國寺の惠瓊を以て和乎とむんと  
 其扱ひ強ひたる所と不あのみとて其委細を見らふとて秀吉は軍  
 中合は厳重なりと清平曾てあるは今度なる松の長陣は行時  
 才候も怠慢なく夜毎は熱構の外ならず又無を多く禁せ其去ら  
 彦又足陣をいいと並發炮を構へ抑へたり又悪びの者殺し人  
 一或二三丁又二三丁の間は隠れ居る敵の間者悪び来り候  
 且相圖を以て去らせ合は程なるも通ひがじらんこそ吉川小  
 川の両ゆる松の塘と切んとさまぐ郷を巡りたるも教て迎ゆる  
 叶り候秀吉が軍令厳重なりとて六月三日の夜才計は彼を  
 彼に腰刀を帯し鞋が鼻の本陣を左へ向ひ悪びやふ通る者あり候  
 候とより刀付候彼より秀集り相圖を教と打明せ廿七日

松百人の足陣いんとて弛ゆる被男と押し合はる候と云せ  
 足はゆるしゆる戒めて候候大なる松が陣（連約かくと）は  
 伴の男と近く引出しとてなる小面は泥とぬりたる細み  
 て大船の本陣（引りたる秀吉と）は細い退き力くして  
 懐を探しむし年々と搜と首二つの状箱をうけたり忽と  
 引きて秀吉の所へ候は秀吉討押切中なる書翰の表書を  
 吉川強守候より川左衛門尉及惟任日向守と記しり是れ  
 の密後戻回信八郎昨二日の夜系惣寺を立出たり約七  
 又弛まり毛利の陣（引んと）せしに秀吉が候は捕ら  
 飛りたるがとてき換わりかく密書をもち集まり秀吉に表書  
 ると遂に弛きて候討は彼曲者と斬殺し首より胸へけ一刀  
 切例と



いんぎ  
 先考  
 密偵  
 誅  
 圖



真蹟言三々前卷並



是即討<sup>す</sup>其<sup>の</sup>息<sup>を</sup>終<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>秀<sup>吉</sup>を<sup>も</sup>死<sup>す</sup>は<sup>ら</sup>せ<sup>し</sup>て<sup>は</sup>汝<sup>等</sup>軍<sup>令</sup>と<sup>も</sup>多<sup>し</sup>に<sup>は</sup>  
 登<sup>り</sup>坂<sup>を</sup>び<sup>く</sup>お<sup>ち</sup>ろ<sup>ふ</sup>ふ<sup>よ</sup>う<sup>に</sup>敵<sup>方</sup>の<sup>間</sup>者<sup>と</sup>捕<sup>ま</sup>味<sup>方</sup>勝<sup>利</sup>の<sup>際</sup>瓜<sup>を</sup>引<sup>き</sup>出<sup>せ</sup>り  
 殺<sup>し</sup>後<sup>も</sup>多<sup>し</sup>う<sup>ち</sup>ち<sup>も</sup>る<sup>べ</sup>し<sup>と</sup>そ<sup>も</sup>同<sup>一</sup>貫<sup>文</sup>で<sup>は</sup>廢<sup>出</sup>法<sup>に</sup>殺<sup>し</sup>ひ<sup>は</sup>り<sup>く</sup>  
 とい<sup>は</sup>あり<sup>し</sup>う<sup>ち</sup>叔<sup>父</sup>被<sup>さ</sup>仕<sup>と</sup>被<sup>さ</sup>見<sup>ゆ</sup>終<sup>ら</sup>ふ<sup>今</sup>月<sup>二</sup>日<sup>京</sup>都<sup>を</sup>終<sup>り</sup>寺<sup>と</sup>  
 三<sup>條</sup>の<sup>城</sup>を<sup>お</sup>ひ<sup>て</sup>信<sup>長</sup>又<sup>も</sup>子<sup>を</sup>討<sup>ち</sup>に<sup>し</sup>早<sup>に</sup>收<sup>め</sup>其<sup>地</sup>を<sup>お</sup>ひ<sup>て</sup>羽<sup>柴</sup>秀<sup>吉</sup>  
 を<sup>討</sup>果<sup>す</sup>る<sup>べ</sup>し<sup>西</sup>三<sup>日</sup>の<sup>中</sup>より<sup>渠</sup>が<sup>陣</sup>中<sup>強</sup>勅<sup>し</sup>自<sup>足</sup>の<sup>並</sup>不<sup>を</sup>  
 久<sup>し</sup>不<sup>遠</sup>其<sup>處</sup>を<sup>系</sup>て<sup>討</sup>終<sup>り</sup>ん<sup>とい</sup>ふ<sup>小</sup>秀<sup>吉</sup>勇<sup>こ</sup>も<sup>忽</sup>ち<sup>と</sup>ら<sup>ぶ</sup>べ<sup>し</sup>  
 是<sup>時</sup>の<sup>一</sup>助<sup>と</sup>ら<sup>ぶ</sup>仍<sup>て</sup>速<sup>に</sup>書<sup>を</sup>呈<sup>し</sup>と<sup>ど</sup>さ<sup>り</sup>ら<sup>る</sup>秀<sup>吉</sup>を<sup>是</sup>  
 を<sup>見</sup>ん<sup>と</sup>す<sup>に</sup>信<sup>長</sup>怒<sup>り</sup>眼<sup>を</sup>赤<sup>く</sup>紅<sup>く</sup>涙<sup>を</sup>流<sup>し</sup>る<sup>瀧</sup>の<sup>如</sup>に<sup>一</sup>夜<sup>に</sup>  
 泣<sup>き</sup>一<sup>夜</sup>の<sup>傍</sup>り<sup>又</sup>一<sup>夜</sup>に<sup>書</sup>翰<sup>を</sup>敵<sup>の</sup>に<sup>入</sup>し<sup>て</sup>我<sup>は</sup>天<sup>の</sup>賜<sup>ひ</sup>  
 ら<sup>る</sup>成<sup>す</sup>べ<sup>し</sup>叔<sup>父</sup>と<sup>安</sup>國<sup>寺</sup>と<sup>和</sup>平<sup>の</sup>を<sup>討</sup>ら<sup>し</sup>む<sup>に</sup>討<sup>つ</sup>秀<sup>吉</sup>を<sup>是</sup>

又毛利三郎の大敵ありてる松の城いまは落し七八日を待りのちう此  
 城水程は隔悉くともふるらんも忽ち後光秀が火爰ありて敵方け  
 り情り知りて其は進退道を失ひ一身存その危急に當りて是處の  
 ねちろせがうれ大の出来の上の諸君を集り浮後も及ぶるれと只  
 一人心は懐く自着赤死にして和平のゆをえ扱ひ終り味方け英氣  
 を失ひてい実の屋中の人僅只此人一人のみ

清水長尾藩門討自害

叔父安國寺の惠燈に再び秀吉の陣に到り西川の返答ありてれ道  
 中よりしんが秀吉をせとせ終ひ清水を助け和平とに渠を殺さば和  
 平なるべし然るの中系義おの致と不をえい終りも秀吉があふ  
 扱ひてい美ありたる城を落しして和平と存んる承きり等乃の

辱かうんし先年捕刃二月の如く尼子勝久山中麻之介を捨く軍  
を引上げ毛利家へ討て我の面目を失ふに似たり就き今法ある宗治  
自害しうとして元寇の如くもまづうんとして再三理義をかく  
中後とも西川宗元を頼りし者若くはけの延引せば京都の要款  
陣へ味方勇く参入して思ひの如く先安國寺の種々の引出りのと  
揚りぬけ扱ひ置るに結ぶるの如く信長も然りと援陣の所然と  
中中し得るに處し勞を厭つた我が計を引くべきやと問はるるに安國  
寺元寇参入の天下の學梅一統たるを思ふるの如く若即の首が  
知らるるの如く何ぞ信長が背き後の患ひを需むべきいふる御中  
いふるに暫て相勸めやとと合議したるに参入して居る中  
とらるるに松の城を清水長九郎門宗治の高義我忠臣并つて武士之

は小船に乗りて城中より引り我言と西川の言に依りて流る宗治は切  
腹にじとせし統る討つ西川の和後忽そのの中國一討は平均とせしと  
汝が功なりと構て輝とるる日ありとて中後安國寺委細なりと  
小船を打ちて城中を離るるに時城を清水長九郎門難波備兵清道松九  
郎門射等其石を審し安國寺の室を参るに虎とありとてつとんま  
る如く史に云とて城門を押用くは城中とて水海く松の城を  
本丸は漕付たり討つ清水長九郎門安國寺ををく拓き其参るに  
城を同く奪取す中後清道を中後清道を中後清道を中後清道を  
め給ふは若川小又川の西の足下の生命を助けいれ和子とせしを  
抄いて我に傳へて記んと宣ふ者若くは中後清道を中後清道を  
辱らるるに参入して居るに似たり就き今法ある宗治の如く



惠獲の松の内 2 きのき 図



和睦調ひるに中國忽乎均し万民其苦を免るるを希ふ  
よりのれ如就せよと一向西に往來して事と計しよむに  
和平の破破せんといふを来く是中の計候を借んといふ  
海(教)候へんといふ宗治熱意とて先候をさくといふ  
元志澄系のまゝに義ね又世にみだしよも今西陣の勝候と計  
よ款い多勢も信長近日よ出張の由れ其勢甚大方  
中國小勢にて見継ぎも味方大敵毛利家の存に計  
とこそまゝに就は適款方より和睦せんといふ送りなげ候  
あ人十人捨給ひても其んで平和あえきりなる小却て我  
ひ強ひ和睦候事し給ひぬこそうもくも難ありよ竹  
後合治なき令所惜くも人あきも仲も助るべき令に  
只今自落しけ和平調ひ死期の面目行りぬまよんやい  
武運よ盡じて情うぬ令つ捨るがれ中國の危を  
諸氏の苦しと賜るのけよのほびやそあえきとて  
吾の陣へ送る書翰を認む其文曰  
謹而存返る意地承く御在洋楚幸方力恐奉  
衆命下致切腹之条を憐愍願候之由被致於寛  
仁之君德悉於御助命を承る依回章明日昏  
辰冠了及切腹の物志小船一艘并美酒佳肴御  
若目了教老兵之服勞の恩々謹言

只今自落しけ和平調ひ死期の面目行りぬまよんやい  
武運よ盡じて情うぬ令つ捨るがれ中國の危を  
諸氏の苦しと賜るのけよのほびやそあえきとて  
吾の陣へ送る書翰を認む其文曰  
謹而存返る意地承く御在洋楚幸方力恐奉  
衆命下致切腹之条を憐愍願候之由被致於寛  
仁之君德悉於御助命を承る依回章明日昏  
辰冠了及切腹の物志小船一艘并美酒佳肴御  
若目了教老兵之服勞の恩々謹言

天正十年六月四日

清水長元清門

勝頼賀小六友

松平七郎右衛門友

右の書翰認り終り安國寺に換けま借奉るの御宗宣に信ひ奉り  
いせ次は元春源系の西におり来自主宰仕るの条御宗宣御用成り  
送し奉る者も許容いあはじく是いと云安國寺感懐を流  
実の忠勇義心の居といま及の御のちり也(英名出今又若く永世  
に於て)け有奉るや送し和乎成統さしとてと急ぎ奉る者  
の陣より宗治の書翰を置し奉るの次第を傳ふるふ奉る者らに  
士哉と感づ給ひけといふく小田毛利和順して天下泰平の基  
と成し和傳が忠功授拜られし一箇の懸書もあはしとて給へ安國  
寺に付信長への裁送せられ給ひ奉る候も是れぞあはれけけ扱

い仕漏るるといふに教多揚らんと福送して居り奉る者若し  
東の城守へ返翰のり其文三曰

御状之様流奉り令相達如代衆命籠城之諸人等御助成之結  
構入致お感即不致懸御奉る者い統去小船一艘酒肴  
十肴を以て明日其尅限檢度不致懸御奉る者い同聲用意不  
あはれい悲惶謹言

天正十年六月二日

勝頼賀小六郎

松原七郎右衛門

清水長尾清門友

六月又日未明信長長尾清門宗治切腹の御宗宣を以て宗治が  
月清入るもよもに定期の仕立と宗治を以てんく止くやたるいこのが

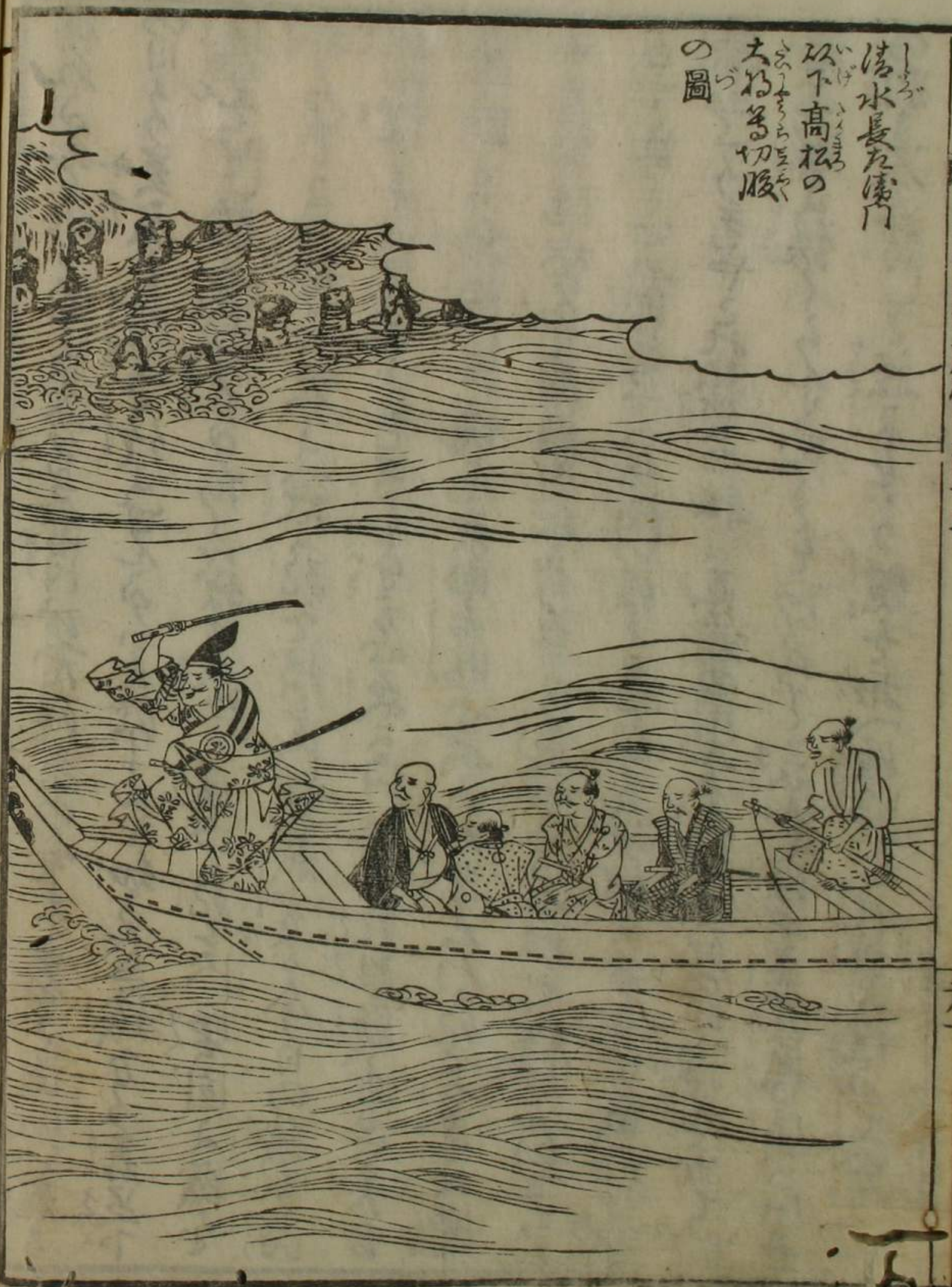
款陣申せし来一人自害して城中の惣軍悉く賜ふる物来りしは  
 生害のゆゑなりと制する所ぞ月津若入にて中中う君をたよるは  
 来我の汝をいれが名相續と云りしをま病めて其怪は何ぞと  
 又の汝にて我智をい汝は漢の汝をい今け難は過り我若我智  
 を終るるは秀若が軍を引け今日生害せん者来たりと云ふ  
 汝元より我汝を先よ生し難は死する所も先に死と云し津辺吾切後  
 の後と見終りて心志が小自害ありと云ふ制とれども更云ふは  
 射は懸えより加勢の大お難波傳兵衛近松を津門射兩人もさし切  
 腹をたしと云長九郎門の毛と止り津辺の切後とい行りそや家と遊  
 て汝國とも人の噂なき小難波死すの命若かり我生害のゆゑ  
 を元難波系西云傳人と終りて難波近松遊くや中中とい心

得ぬのを承る者も来る不肖は元難波系の命を蒙り出城(籠る  
 の目より妻后と死生と傳せしめしと云はれしとも知るべき後方り君下  
 送心をせ教は味せりゆゆは我を死に送て死に送堅固は城を  
 守らるるは扱ひく我も死に送に送我も死に送今日の敵を  
 死の程とせいれやと云も生る心更は射は懸既むとい秀若  
 が陣所より檢後して城屋敷助若傳小松は元難波系と云ふと云  
 よといは清水足牙難波近松秀若より送りたる小松と傳げよか  
 と十郎と云ふ節も一人は城の役とてとも又此松は打多り城門と開  
 傳せりそやこれ弘誓の船は慈悲の舟をえけし死の此岸を出て  
 羅の塵を脱くらんもかくこそ何れも表とて場て妻子眷属は世  
 の別と今傳しと懸とてぐり機を和(送懸む我勢の程とて余は



神田川三ツ木川合流

五



清水長左衛門  
以下高松の  
大船多切腹  
の圖

真蹟言三篇卷十二

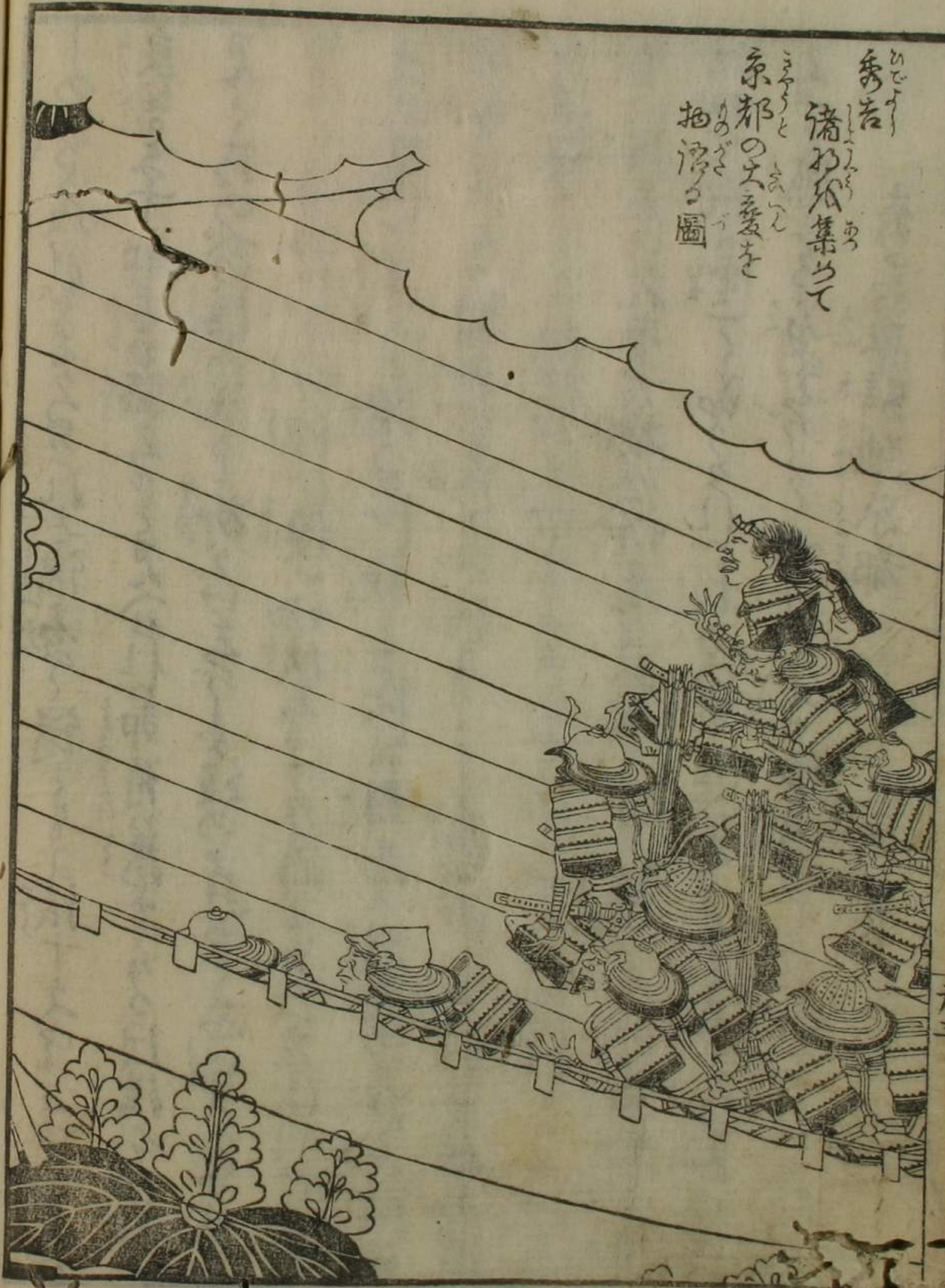
五

後を儒くろく秀吉の本陣より宗治ら下の自軍をえんと  
 並びあへて見物し西方の船近くあり宗治をうけ礼をいせ  
 利をいひいへて厚意を倍せらばは清の長九郎門は入るは清徳の  
 照元の旗下鉄炮のお難波傳兵衛近松九郎門射口人只今切腹は  
 しての我く守軍の後統系守友と右馬殿和賂の俊兵衛執白偏は  
 いと懇懇と相述はる尾も近く船はよせせり後系守が近おる尾  
 茂助吉晴とてい行のに知してとも御事のゆへははらまはし  
 守る御ねがひの結構はる感とやうに物事の旨も相違はるは  
 く心静には害逐らるべしに人々の者候はれしてはびのまこと  
 及び長九郎門射口治まよりいで美船の一曲奏んとて腰刀引ぬき  
 以より清き度し河舟を止めて達原の浪まらる厚母の養と刀を

の驚きぬがとるまじと備敵と諸ともは後十文字は切腹は  
 良等と十郎を振ると見えし即着の落るるは清の長九郎と  
 見えし清の流る柳が志がが程のよれ中よ心止るを物候  
 ちると妻母しくお祝ひ續て切腹まらる御は近松九郎門射口を  
 この板敷と丁くと踏らし款と刀はし群居る鬪岡の養と皮は  
 浦風とらる松の朝の病とぞ清とらると妻瓜はし清の智難波傳  
 兵衛清もよは後切腹して伏らるる十郎に人々の死骸をえぬ光  
 着に姓名のれを付檢後尾はお後し其後已も後き切腹  
 押切て終は清くあうたれは敵方の軍兵とてあられ大團の兵  
 るる感とる妻とらるく明りも止らるる

秀吉の軍騎馳系都





秀吉  
備わら集りて  
京都の文彦を  
物済の圖

真景詞三篇卷上

於て安國寺裏懐い毛利の陣へ立入りはあらず以下切換の陣  
 中々いし西の其勢は極い富家のあま令を捨つりし忠功進り  
 又勝らんと感涙あまふてぞ世にたれ其府ふあふ兵卒とも  
 神をぞ縁々るえまの曰く宗治生害の上の位方なり  
 後中法とてと安国寺と秀吉の陣(其)其方  
 細中法とせらる秀吉中法と西川和平取討のより互に  
 をあふはし我今うの急なる子細あつてのびくちる計ひ  
 具の安國寺の裡来もを候わるるべき我先記法文を  
 牛耳の程よしの神祇と我盟文と去小指を裂て血を淋  
 寺の毛と後(秀吉)心危かくのぞしけし心危あふ力  
 別条とんまきとあひての和信えま隆系が誓書田  
 未だ(秀吉)とくくと急ぎ法入の安國寺毛利の陣へ馳ゆる  
 盟書とて出さるの候を相傳ふ西の安国寺と書各血  
 判を押安國寺よふぬまの安國寺又急ぎ秀吉の陣  
 睦おあひの候し糸(秀吉)世傳の記法文を秀吉の  
 赤い遺度の襷袋にしてゆ令三袋安國寺に揚ひ  
 少はあはしと中法入の安國寺候ふり限りし  
 と西陣和平の候びとも酒一荷菓字一牌を  
 皆揃果の候ひあまはせと送りしと安國寺  
 終ふ終りて軍中の諸將と悉く相傳ふら  
 り雨のどく諸軍をたたくる多分多ひ  
 とくくはあふふと良渡を押へ終ひ

未だ(秀吉)とくくと急ぎ法入の安國寺毛利の陣へ馳ゆる秀吉入  
 盟書とて出さるの候を相傳ふ西の安国寺と書各血  
 判を押安國寺よふぬまの安國寺又急ぎ秀吉の陣  
 睦おあひの候し糸(秀吉)世傳の記法文を秀吉の  
 赤い遺度の襷袋にしてゆ令三袋安國寺に揚ひ  
 少はあはしと中法入の安國寺候ふり限りし  
 と西陣和平の候びとも酒一荷菓字一牌を  
 皆揃果の候ひあまはせと送りしと安國寺  
 終ふ終りて軍中の諸將と悉く相傳ふら  
 り雨のどく諸軍をたたくる多分多ひ  
 とくくはあふふと良渡を押へ終ひ

ひびり  
たき  
単騎  
系都  
と  
張  
堂  
圖



日京都とて惟任日向守光秀が運心より御家より御守り  
くくろそやと云ひて落渡文は止まらば熱軍を以て御  
るゆたふんは御周章候之實は存心之憂く不を以て  
奪て中流の毛利和奉調の上は御もよく都へ馳参之君の  
合戦を言んと然以責と為陣を以て御候て路より馳の  
構へて是系あぐり候と云ひ捨と云んと御を以て馬引  
一鞭を以て驅出候は御時時須知は坂尾中村加後行相  
右服坂平御を首に御留置候後馬出り我抄に是と馳参  
中と瓜分と強勅に候らんやうにさうらう

繪本古圖記三篇卷之十二後

繪本古圖記

四篇

全部十二冊

近日出來

浪華

法橋 玉山画圖

此編に載らるる秀吉中國より上洛あり多尼ヶ橋に  
諸候を會合し惟任光秀と山崎の接戦及び柴田  
勝家瀧川一益等上洛信長公葬送紫地大徳寺  
に抄いと燒香の次第并羽柴柴田瀧川等不和の事  
賤ヶ嶽の大戦中川原赤井討死柳ヶ原の七本槍  
まで秀吉公天下平定し終ふと委しくいへり

